みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

A Review on Environmental Studies on the Northwest Coast of North America

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 立川, 陽仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00010009

岸上伸啓編『環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する研究動向』
国立民族学博物館調査報告　156:461-484(2022)

北アメリカ北西海岸の環境論史の動向

立川　陽仁
（三重大学）

1　はじめに
2　文献リストの作成と収集および本論文の構成
3　20世紀までの環境論とその動向──古典的人類学の時代
3.1　生態人類学にいたるまでの人類学の動向
3.2　漁業と先住民
3.3　小括
4　今世紀以後の環境論──アプローチの多様化の時代
4.1　TEK 研究
4.2　気候変動の影響や対策をめぐる資源論
4.2.1　先住民の認識や要求を明示する研究
4.2.2　共同管理の制度が孕む構造的問題を指摘する研究
4.3　多様化した人類学
4.4　小括
5　終わりに──北アメリカ北西海岸の環境論の将来像に向けて

1　はじめに

本論文の目的をあえて広い包括的な枠組みでいうならば，北米の太平洋沿岸北西部，とくに北西海岸と呼ばれてきた地域に暮らす先住民と，自然環境や資源との関わりについての研究史を辿ることである。ここではこのテーマをあえて〈北西海岸の環境論〉と呼ぼうと思う。

当該地域の先住民と自然環境や資源との関わりをあえて〈環境論〉と呼ぶという着想は，パトリシア・タウンゼントの著のタイトルにもある「環境人類学」に由来している。タウンゼントはこの「環境人類学」というジャンルを，文化生態学に端を発し，その後生態人類学へと発展しながら，こんにちではさらに幅広く生態系や環境上の問題を扱えるような，包括的なジャンルとして設定している（タウンゼント 2004: 17-20）。

本論文の設定した環境論という枠組みも，基本的にはタウンゼントと同じ発想にもとづいている。というのも，北西海岸においてもとくに今世紀に入って以後，従来の生態人類学的な関心と生態系，資源，環境にまつわる現代特有の関心が交差するような問題がとりあげられ，分かちがたく論じられるようになったからだ。2015年に発表されたデイルとナッチャーの論文には，まさにそのような例があげられている。カナダ太平洋沿岸のバンクーバー島南部，ダンカン市周辺に暮らす先住民カウチン（Cowichan）は，近年地元カウチン川に伝統的な簗をおき，伝統的な手法でサケ漁を復活させようと試みている。この計画はいくつかの問題があって頓挫した状況にあるが，その簗は現在カウチ

ン川を遡上するサケの計測のための道具として活用されている（Dale and Natcher 2015）。この例では，伝統的なサケ漁の復活という側面は生態人類学的な問題に属すだろうし，彼らの簗がサケの遡上数の計測に役立っているという側面は応用学的な資源論の問題に属すだろう。このカウチンの例を理解するためには，どちらか一方のジャンルに拠るのではなく，多角的な視点が求められることになる。この意味で，タウンゼントの提唱した「環境人類学」という枠組みは，本論文の問題意識とうまく重なりあう。ただ，ここでは人類学のみならず他の学問領域も扱っていくので，タウンゼントの提唱した「環境人類学」から「人類学」の語をとり，〈北西海岸の環境論〉とした。ここにはもちろん，従来の生態人類学をはじめとする人類学的な研究だけでなく，社会学や歴史学などのほか，分野横断的な資源論も考慮されることになる。

北西海岸の先住民を対象にした研究といえば，長い間人類学の独壇場であった。ただ，研究される対象にはおおいに偏りがあり，ポトラッチと呼ばれる儀式やトーテム・ポールに代表されるアートの研究にくらべると，本論文が扱うような環境論，つまり自然や資源と先住民の関わりを扱う研究は極めて少なかったといわざるを得ない。私が2005年に提出した先住民集団クワクワカワクゥ（Kwakwaka'wakw）とサケ漁業や生業への参与に関する博士論文の文献リストには，この地域の先住民に関する環境論の枠組みに入る先行研究が約25点あげられている。そしてこれを執筆している2021年現在，ほぼ同じ領域の研究レビューをしようとするにあたり，私は約70点の業績をとりあげようとしている。もちろん私が博士論文を提出したときと現在では，紹介する文献の種類が完全に一致するわけではない。とはいえ，博士論文を書くまでに発表された環境論関連の業績の少なさと，それ以後に発表された業績の激増ぶりは理解できるのではないだろうか。本論文は，これら近年になって生みだされた数多くの研究のすべてとはいわないまでも，できるだけ多くのものを考慮しつつ，北西海岸の環境論の流れを辿り，その傾向の一端を明らかにしようとするものである。

なお，本論文は，北西海岸の一部の先住民がおこなってきた捕鯨に関する諸研究，および考古学的な研究を対象から除外している。前者については日本語で読めるすぐれたレビューがあり（岸上 2019），また後者については（1990年までに発表されたものについては）英語で書かれた詳細なレビューがあるので（Carlson 1990）そちらを参照されたい。また，ここで扱う文献は，2020年に私が発表した別の研究動向（立川 2020）と一部重複することも断っておく。こちらは近年の気候変動がカナダのブリティッシュ・コロンビア州水域に与えた影響について論じた研究のレビューとなっている。

2　文献リストの作成と収集および本論文の構成

さて，今回，北西海岸の環境論史をまとめるにあたり，私はだいたい2000年を目処に，

それ以後に発表された文献を集中的に収集することにした。それ以前に発表されている文献は，過去に博士論文を書いた際すでに収集していたからである。2000年以後に発表された文献は，おおよそ以下の方法で収集した。まず私は，ブリティッシュ・コロンビア大学刊行の *BC Studies* 誌巻末にある，ブリティッシュ・コロンビア州に何かしら関連した文献目録から該当する文献を抜きだし，そのリストを作成した。つぎにそのリストにしたがって，文献を収集した。これらの作業において，私は同大学大学院所属の人類学者，永井文也氏による多大な協力を得ることができたし，彼の協力がなければ今回紹介する文献を収集することなどできなかっただろう。*BC Studies* 誌の文献目録は，英語で書かれた同州に関わる文献ならば，分野を問わずほぼ完璧に網羅している。つまりこのリストを利用したことで，北西海岸の環境論に該当する文献をかなり網羅的に捉えることができたと私は考えているが，この方法には同時に２つの限界もある。第１に，*BC Studies* 誌の文献目録はブリティッシュ・コロンビア州と関わりがある研究に限れば極めて網羅的であるけれども，たとえば米国アラスカ州の南部など，北西海岸の一部に組み込まれているがブリティッシュ・コロンビアの外にある地域は除外されている。第２に，今回のレビューでとりあげる対象とみなした文献を，私は当誌の目録に掲載された論文の題目のみから選びだしたので，仮に研究の対象となるテーマが論文の題目に直接反映されていないものがある場合，私はそれらを見逃した可能性がある。以上のような限界はあるが，それでも今回極めて多くの文献にふれられたこと，そしてそこからある程度の研究史の傾向がみてとれることは強調してよいと思う。

つづく節では，北西海岸の環境論を実際にたどっていくが，本論文では便宜的に研究史を２つの時代に分けて論じることにする。北西海岸の環境論史は，だいたい1990年代後半から2000年代前半にかけての10年間を過渡期として，それ以前と以後で大きな違いがある。そこで次節では，北西海岸の先住民研究がはじまった19世紀後半から上記の過渡期となる10年間まで（便宜的に「20世紀まで」と呼ぶ）を振り返る。それにつづく第４節では，この過渡期から現在まで（便宜的に「今世紀以後」と呼ぶ）の研究を振り返っていく。

3　20世紀までの環境論とその動向 ── 古典的人類学の時代

北西海岸の先住民に関する研究は，19世紀後半，人類学からはじまったといってよい。アメリカ文化人類学の父であるフランツ・ボアズにはじまり，彼の弟子たちによって継承されたボアズ派人類学者たちの研究の営みは，1970年頃まで北西海岸の先住民研究の主軸でありつづけた。とはいえ，これら人類学者の多くは家族史や言語，あるいはこの地域の先住民を世に知らしめたアートやポトラッチの研究に明け暮れ，本論文でいうところの環境論にはほとんど目もくれなかったというのが現実である。彼らが仮に環境論，

とくに生態学的な側面に言及するにしても，民族誌や概説書の一部でごく簡単にふれるだけか，せいぜい章の１つを割くに過ぎなかった。

20世紀を通じ，北西海岸の先住民研究において環境論が主流になることはなかったが，それでも1960年代になると，ちょっとした生態人類学的な潮流が生まれる。その発端は，ポトラッチ研究史のなかで「財の贈与が生態学的な条件に左右される」という主張が生みだされたことである。これ以後，いくつかの生態人類学的な研究が発表されたほか，過去の未出版原稿が出版される機会を得た。

これら生態人類学的な研究が今世紀を迎えるまでの環境論の主軸であったことは明らかである。ただ，生態人類学がおもに扱っていたのは先住民の伝統的な生業活動であり，19世紀後半から生業と同じくらい積極的に従事されていた近代産業下の労働（とくに商業的な漁業操業）が論じられることはほとんどなかった。後者の活動は，ブリティッシュ・コロンビア州の漁業の歴史を再構成しようとする歴史研究，および先住民の近代化経験を分析しようとする社会学的研究，そして20世紀後半から少しずつ刊行されていった先住民の自叙伝においてしか論じられることがなかった。

以上のことをふまえ，本節では以下，19世紀後半から20世紀終わりまでに発表された文献を，「生態人類学の誕生にいたるまでの人類学の動向」，「漁業と先住民の関係について論じた業績」という順に振り返っていく。

3.1 生態人類学にいたるまでの人類学の動向

すでに述べたように，北西海岸の先住民研究は人類学者ボアズによってはじめられ，その後は彼の弟子たちによって継承されてきたが，意外にも長期のフィールドワークを経験した人類学者は少ない[1)]。そのため，作成のために長期のフィールドワークを必須とするような，数百ページに及ぶ包括的な民族誌の数もけっして多くはない。ここでとりあげる３つの民族誌は，いずれも長期のフィールドワークを実施できた数少ない人類学者によるものである[2)]。その３つとは，ボアズの膨大な記録を弟子であるヘレン・コディアが編集し，ボアズの死後発表したクワクワカワクゥの民族誌（Boas 1966），デ・ラグーナによるトリンギット（Tlingit）の民族誌（De Laguna 1972），ローナーによるギルフォード島民（クワクワカワクゥのなかの１つの集団）の民族誌（Rohner 1967）である。これらの民族誌では，言語，宗教，儀礼（ポトラッチ），社会構造などと並んで，１つの章や節が環境論，つまり現地の生態環境や生業活動の記述に充てられている。民族誌全体からすればごく部分的な紹介に過ぎないが，民族誌のデータ量そのものが多いため環境論に関する情報もそれなりに多い。これはとくに３巻本として出版されたデ・ラグーナの民族誌にあてはまる。

また，これら民族誌の記述は，他の短めの研究論文などとあわせて，北西海岸ならびに北米全体の先住民文化に関する概説書の類にも引用され，改めて紹介・分析されるこ

ともあった（e.g., Driver 1961; Drucker 1963［1955］）。こうした概説書の集大成の１つが1990年にスミソニアン協会より公刊された*Handbook of North American Indians*のシリーズであり，その第７巻が北西海岸先住民に関するものである（Suttles ed. 1990）。これらの民族誌や概説書において明らかにされたのは，おおよそ以下の点である。

１）北西海岸の先住民は，海や川の水産資源に高く依存した狩猟採集民である。
２）そのなかでも太平洋の５種類のサケへの依存度が高かった。
３）豊富なサケ故に定住が可能になり，人口密度が増え，社会制度や儀礼が発達した。

以上３点の特徴は，いずれも後の生態人類学的研究の誕生に大きく寄与した。だが，この段階ではこれ以上に詳細な情報，たとえば生産活動の技法，道具，シーズン（年周期），生産ユニットの編成，資源管理の手法などはほとんど提示されなかった。これら具体的な問題の解明は，生態人類学的研究の誕生まで待たなければならなかったのである。

北西海岸の先住民研究のなかで，経済活動の領域に特化した生態人類学が登場したのは1960年代になってからだといえる。その発端となったのは，当時の北西海岸の人類学において主流派を担っていたポトラッチ研究のなかで「ポトラッチにおける財の分配は親族集団間の資源の偏りを均衡化する機能をもっている」という主張が現れたことであろう。この主張はまずサトルズによりコーストセイリッシュ（Coast Salish）を対象に提唱され（Suttles 1960），後にヴァイダとピドックによって支持され（Piddocke 1965; Vayda 1961），再びサトルズによって北西海岸全体にある程度あてはまるものとして展開された（Suttles 1968）。

その後，サトルズらに直接影響されたかどうかは不明だが，いくつかの生態人類学的研究が立て続けに発表されていく。1933年に提出されたオバーグの博士論文が単著として公刊されたのが1973年のことである（Oberg 1973）。この著はトリンギットの経済活動，とくに伝統的生業を，捕獲対象，技法，生産ユニット，年周期（移動パターン）など多岐に渡って詳細かつ体系的に記述した，典型的な生態人類学的民族誌である。その４年後には著述家のスチュワートによって北西海岸の先住民の漁撈の対象，漁具，漁法に関する著作も発表された（Stewart 1977）。彼女はフィールドワークにおいて目にしたさまざまな漁具，漁法（の写真）などをスケッチし，その夥しい数のスケッチを数枚の写真と解説文とともにあげている。この著を「アマチュア民俗学者の道楽」と捉える意見もあるが，この著のなかで示される夥しい漁具のスケッチと詳細な分類には，十分学術的な貢献が認められる[3)]。

人類学者のドナルドとミッチェルによる一連の業績もまた，生態人類学的研究に位置づけられるだろう。両者はフィールドワークをしたわけではないが，数々の数量的データを参照しつつ，クワクワカワクゥの親族集団のランクと資源量の相関関係（Donald and

Mitchell 1975)，北西海岸中部から南部にかけての各親族集団が実際に捕獲していたと思われるサケの量とその配分（Donald and Mitchell 1994)，北西海岸一帯において実際に採取されていた資源の種類と生産活動全体に占める比率（Mitchell and Donald 1988)，ウーラカン（Eulachon, この地域でその魚油が珍重されたキュウリウオ科の魚）の漁撈とその魚油の分配（Mitchell and Donald 2001）を検証した。なお，このウーラカンの漁撈と魚油の生成の技術については，マクネアによる情報提供もある（Macnair 1971)。

以上にとりあげた生態人類学的研究は，先述の民族誌や概説書にくらべると，先住民の経済活動の詳細と社会組織との関係をはるかに具体的に論じている。ただ，その対象はあくまで伝統的な生業活動であり，20世紀を通して先住民が生業活動と同等，あるいはそれ以上に精力的に参加していた商業的な漁業操業が言及されることはほとんどなかった。私が思うに，ここには当時の人類学者たちが共有していた２つの前提が影響している。その１つは「先住民の伝統が近い将来失われる」という前提である。だから人類学者たちは，その前に紙上に救済（記録）することを共通の使命だとみなした（Bruner 1986: 143)。もう１つは「漁業操業とは生業としてのサケ漁の単なる延長だ」という前提である（Kew 1990: 162–163)。しかしこれら２つの前提は，以下でみるように，人類学内外から批判されることになった。

3.2 漁業と先住民

人類学者に敬遠された先住民と漁業の関わりは，一方ではブリティッシュ・コロンビア州の漁業史を再構成・分析しようとする歴史研究，他方では先住民の近代化経験を探求しようとする社会学的研究により，20世紀後半から少しずつ注目されていった。

歴史研究では，まずニュウェルが大々的に漁業史を史料から再構成し，政治学的に分析した（Newell 1994)。この著ではヨーロッパ系，日系，先住民の漁師のほか，政策決定者であるカナダ政府による１世紀以上にわたる漁業および資源管理をめぐる政治的紛争が体系的に辿られている。その後まもなく，こんどはハリスが同じく漁業史に関する単著を立て続けに２冊発表した（Harris 2001; 2008)。ハリスの２冊の著はどちらもニュウェルの著と大筋において問題意識を共有しているが，対象として設定される時代のスパンがニュウェルより広めで，政治的側面よりは法的側面を深く掘り下げているという違いもある。なお，ハリスの著は正確には2000年以降に出版されてたものだが，ニュウェルの著との連続性を示すため（その連続性はハリス自身が2001年の著の序論で述べている)，あえてこの箇所でとりあげている。

社会学的な研究としては，おそらくグラッドストーンの比較的短めの論文（Gladstone 1972）が，先住民と漁業との関わりに関する最初の本格的な研究であろう。さらに，これにつづいて，ナイトが19世紀後半以降，近代産業に携わる先住民の労働の実態を業種ごとに論じた著を発表し（Knight 1996)，その著の１つの章で漁業に携わる先住民の技

術，労働の組織化，政治的困難などについて論じている。これら社会学的な研究は，キューが示していた先述の人類学における「漁業操業は生業の単なる延長なので，適応は容易だった」という前提を強く批判するものとなった。

これら歴史研究と社会学的研究のほか，20世紀半ば頃から出版されている先住民の自叙伝でも生業活動と漁業への参加の在り様が記述されている。これら自叙伝のなかでもとくに環境論への貢献度の高さにおいて重要なのは，漁師経験のある人物のものになろう。クワクワカワクゥのチャールズ・ノウェル（Charles Nowell）の自叙伝（Ford ed. 1968[1941]）は，北西海岸の先住民に関する長編の自叙伝としては最初のものであり，20世紀初頭に漁業に参入することで彼ら先住民の生活がどう変容したか，漁師へのリクルート制度がどういうものだったかなどを明らかにしてくれている。ビレッジ島の世襲チーフ，ジェームズ・シウィド（James Sewid）の自叙伝（Spradley ed. 1972[1969]）は，20世紀半ば頃における生業活動の変容から，漁業において当時最新の技術だったまき網に適応する苦労や工夫にいたるまで，幅広く記録している。最後に，クアドラ島のチーフ，ハリー・アスー（Harry Assu）の自叙伝（Assu with Inglis 1989）は，まき網に適応するための修業の制度に加え，彼の父の時代（19世紀後半から20世紀前半）における生業活動の捕獲対象，具体的な捕獲場所，生産ユニット，１年の活動パターンに関する詳細な情報を残してくれている。これら３人の先住民漁師の自叙伝，とくにシウィドとアスーのそれは，生業活動が20世紀に入った後も綿々とつづけられたことだけでなく，商業的な漁においてまき網という漁法に適応するため彼らがさまざまな困難を経験し，それを試行錯誤の末乗り越えてきたことをわれわれに伝えてくれる。そしてこれらのことから理解できるのは，ひとつには，商業的なサケ漁はけっして生業活動の単なる延長ではないことであり，もうひとつには，伝統的な生業はいくらか形を変えたとしても連綿とつづけられてきたということである。このように，自叙伝は人類学において長く維持されてきた２つの前提を批判するのに貢献している。

最後に，人類学において漁業と先住民の関わりを論じた，当時としては「例外的」な研究を２つ紹介しておこう。１つはドラッカーによる先住民同胞団（Native Brotherhood）に関する研究である（Drucker 1958）。この研究はあくまで組織としての先住民同胞団の発足と機能を紹介するものだが，この組織が漁業に携わる先住民漁師の労働組合としても機能した点においてのみ，漁業に従事する先住民の姿が描写されている。もう１つはアメリカ側のルミ（Lummi）と漁業の関係を記録したボックスバーガーの民族誌である（Boxberger 1989）。この著では，ルミが漁業に参入しようとして失敗した挫折が従属理論から分析されている。

3.3　小括

19世紀後半に誕生した北西海岸の環境論は，以後100年以上に渡り，おもに人類学に

よって維持されてきた。とはいえ，人類学のなかでも環境論はけっして主流派ではなく，20世紀前半までは数少ない民族誌や概説書のなかで，現地の生態環境と生業活動の捕獲対象に関するおおまかな情報を提供するのみであった。この状況にいくらか変化をもたらしたのが，1960年代に誕生した生態人類学的研究であった。

生態人類学的な研究の最大の貢献は，先住民の伝統的な生業活動の実態を詳細にわれわれに伝えてくれたことにある。しかしそこには，同時に問題点もあったといわざるを得ない。上にも述べたように，その問題とは当時先住民が精力的に携わっていた漁業の操業に関する情報が欠如していたことである。自叙伝の記述をみる限り，当時の先住民にとって漁業の操業は生業活動と同程度かそれ以上に重要な生産活動だったことがわかるが，生態人類学はある種の偏見からこの重要な活動を敬遠し，その欠落は歴史研究や社会学的研究によって補われなければならなかったのである。

4　今世紀以後の環境論 ── アプローチの多様化の時代

北西海岸の環境論は，1990年代後半から2000年代前半にかけての約10年間を過渡期とし，その前後で大きく様変わりする。この過渡期に起こったできごととは，北西海岸全域において進行した資源の減少である。1990年代，北西海岸ではサケなどの水産資源の減少が深刻化した。これを受けて，近代科学を軸にした資源管理法への疑念が今まで以上にあからさまに表明され，それと同時に過去数千年に渡って資源を適切に管理してきた先住民の管理術に注目が集まっていった。このとき新たに研究者の関心を引いたのが先住民の伝統的生態学的知識（Traditional Ecological Knowledge（TEK））やそれにもとづく資源管理術あり，またTEKと科学的生態学的知識（Scientific Ecological Knowledge（SEK））の関係である。こうしたTEK研究にまず着手したのは，過去100年以上に渡って先住民研究全般を先導してきた人類学だった。その後，TEK研究は一時の勢いを失ったかのようにもみえるが，先住民とのコラボレーションによるプロジェクトの形で現在も若い世代への教育に役立てられている。

だが，もはや人類学は現在の北西海岸の環境論を主導する役割にはないといわざるを得ない。現在の環境論の中軸は，人類学から資源論というジャンルに移されたというべきであろう。資源論において，先住民はTEKの保持者としてはもちろん，資源管理政策に携わる主体の１つとして極めて重視され，今世紀に入ってじつに多くの研究業績のなかに登場している。

ただ，資源論における先住民の登場の仕方と人類学におけるそれは，いくぶん違っているのも事実である。そしてこの違いは，先住民と自然環境との関係の背後にある，先住民の自然に対する認識ないし世界観をそれぞれの分野がどう扱っているかに現れている。すなわち，資源論および実際の行政が先住民の世界観を敬遠するのに対し，人類学

はその重要性を前面に押しだすようになったのである。人類学が主導した20世紀までの環境論がいわゆる「行動系」の学問だったとすると，今世紀に入ってからの環境論における人類学は，「認識系」の学問としての側面を強く打ちだしている。そしてこうした「認識系」としての面は，今世紀の環境論における人類学にある種の多様化をもたらしている。

こういった現在の状況をふまえ，本節では今世紀の環境論の研究を，便宜的に「TEK研究」,「気候変動や資源減少の影響および対策を考察する資源論」,「多様化した人類学」という項目ごとに紹介していく。

4.1　TEK研究

北西海岸では，漁業や林業などの産業が発達するにつれ，20世紀以降たびたび資源の減少や枯渇が問題視されてきたが，1990年代にはこれらの問題が以前にも増して深刻化した。それに伴い，自然科学と経済学にもとづくそれまでの管理法が批判にさらされ，反対に過去数千年に渡って資源を適切に管理してきた先住民の管理術が注目されていった。

こうした時代の流れを受けて，まずは人類学において，先住民が伝統的に保持していた生態学的な知識や技術を紐解こうとする研究が現れた。その旗手となったものの１つがブリティッシュ・コロンビア大学の人類学者メンジーズが立ちあげた「未来のための森（Forests for the Futures, 現在はForests and Oceans for the Futures)」という同大学の教育研究プロジェクトである。少なくとも2002年にはすでに立ち上げられていたこのプロジェクトでは[4)]，ツィムシャン（Tsimshian）など先住民コミュニティとブリティッシュ・コロンビア大学間のコラボレーションで先住民のTEK調査がおこなわれ，それが研究だけでなくツィムシャンへの次世代教育にも活用されながら現在にいたっている。また，2004年にはこのプロジェクトの成果が学術雑誌で発表されている（e.g., Butler 2004; Ignas 2004; Lewis 2004; Menzies 2004)。このプロジェクトのメンバーであるバトラーとメンジーズは，ほかにもツィムシャンを中心的な対象としてさまざまなTEK研究の成果を発表しているが，そのなかの１つではツィムシャンの伝統的な漁業管理術のうち，選択的漁業の手法を現代の漁業に活用する方法が模索されている（Menzies and Butler 2007)。

一方，アラスカのトリンギットとハイダ（Haida）に関しては，人類学者のソーントンがTEKに関する一連の研究プロジェクトを立ちあげ，成果を発表している。彼は他の共同研究者との共著論文で，ニシンを対象に先住民の伝統的保護の手法を管理政策に活用する意義を概説し（Thornton et al. 2010a; 2010b)，先住民とアラスカ州政府の管理手法の違いをゴフマンのフレーム理論から解説した（Thornton and Hebert 2014)。また，ニシンという生物種ではなく産卵場の保護こそが有効だと主張している（Thornton 2015)。

メンジーズらにせよソーントンらにせよ，彼らの対象は先住民のTEKであった。しかしなかには，ライトの論文のようにSEKの成り立ちを歴史的に後付ける研究もある。ライトによれば，SEKもまた本来正当性が自明でなかったものであり，20世紀を通じて次第に政治的な権威付けを施され，その過程で現在の正当性を獲得したものであった。しかしその権威も現在おおいに揺るがされているという（Wright 2010）。

また，日本では，岩崎・グッドマンがクワクワカワクゥのサケの管理をめぐるTEKとSEKの軋轢を紹介している（岩崎・グッドマン 2002）。

もちろん，これらのほかにもTEK研究は多々あるのだが（注6参照），それらをふくめTEK研究の多くは人類学者の手によるものである。ただ，これら人類学者の研究成果が必ずしも人類学（およびネイティブ・スタディーズ）関連の学術雑誌で発表されるとは限らない。たとえば先述のソーントンらによる4点の研究のうち，明らかに2点は次項（4.2）にて紹介する資源論系の雑誌や報告書に書かれている（Thornton et al. 2010a; Thornton and Hebert 2014）。資源論の詳しい説明は次項に譲ることにし，ここでは単に，資源論とは社会科学を軸とした応用学的なジャンルだというにとどめておこう。さて，ソーントンらによるTEK研究のうち，人類学的な論文と資源論系の論文にはある無視できない違いがある。メンジーズらの研究およびソーントンらの人類学的な論文では，先住民の伝統的な資源管理の技術的側面だけでなく，その背後にある彼らの自然に対する知識や認識，およびその基盤となる世界観が詳細に記述されている。それに対し，ソーントンらの資源論系の論文ではこの世界観の側面への言及がいくぶん簡素化されているのである。おそらくその理由は，資源論が応用学的なジャンルであるからだといってよいだろう。先住民のTEKを実際の資源管理政策に活用する限界はすでにナダスディが指摘しているところだが（Nadasdy 1999），北西海岸の現状をみても，実際の行政にTEKが十全に活用されているとはいい難い。私が考えるに，行政がTEKを実際の政策に活用するにあたっての最大の障壁は，その基盤となる先住民の世界観にある。実際の資源管理行政とそのための応用学的なジャンルである資源論が求めるのは先住民の管理技術とそれに付随するTEKの断片であって，その土台にある先住民の世界観ではない。だからこの世界観と切り離すことが難しいTEKは敬遠される傾向があり，仮に敬遠されない場合でも世界観への言及は控えめになされ，実際的で技術的な面のみが語られる傾向が強いのだと考えられる。

では，なぜソーントンは自身のTEK研究の一部を資源論系のものとして発表したのか。私にはその正確な答えを知る由もないが，1つ確実にいえるのは，ソーントンもメンジーズらと同様，調査時にTEKの土台にある先住民の世界観の重要性を軽視していたわけではないということである。そのことは人類学系の雑誌に書かれた彼のTEK研究およびこれらの研究とほぼ同時期に発表された彼の別テーマの単著（4.3参照）をみれば明らかである。あくまで私の推測だが，ソーントンは資源論研究者としての自分と人類学

者としての自分を器用に使い分けていたのではないだろうか。資源論研究者としての彼がTEKを実際の政策に反映させるために先住民の世界観をあえて平坦に語ったのに対し，人類学者としての彼は先住民の世界観を前面に押しだした研究を展開したように，私には思えるのだ。

4.2　気候変動の影響や対策をめぐる資源論

北西海岸での資源の減少および気候変動の影響は，上記のTEK研究のほか，先ほどからたびたび名前があがっている資源論という新たなジャンルを生みだし，活性化させた。

ここでいう「資源論」とは，たとえばフェミニズム研究や平和論と同様，何か特定の学術領域を指すというよりは，さまざまな分野を横断しながらも１つのテーマ――ここではある地域の生態系や資源の保護政策への貢献――に関わる議論を多角的に展開するジャンルである。カナダでは，環境資源論，生態資源論，資源管理論などさまざまな呼び方をされ，それが大学の学部や学科の１つを構成する単位にもなっているが，本論文ではあえて単純に「資源論」と呼ぶことにしたい。この項で私が「資源論的研究」と括る文献のなかには，明らかにこの括りに属すとみなせる――たとえば資源論系の学術雑誌に書かれているとか，執筆者の所属が資源論系の学部であるなど――ものもあれば，そうでないものもある。ただ，ここで私が「資源論」の名で括ったジャンルには概ねつぎの２つの特徴があり，それらの特徴を備えたものはここで「資源論的研究」とみなすことにした。その特徴とは，１）社会科学（とくに経済学，政治学，社会学）を中軸に据えながらも，自然科学や人文科学の特性も備えているなど分野横断的なこと，そして２）資源管理政策に提言をするなど，応用学的な面をもっていることである。実際，ここで私が「資源論的研究」とみなした文献には，極端に人文科学寄りのものもあれば極端に自然科学寄りのものもある。ただ，いかなる研究であれ，先住民はTEKを所有するステークホルダーの１つとしてだけでなく，資源の共同管理や環境アセスメントを担う主体として，さらには，養殖業や地下資源発掘業など将来現地の経済を支えるものと期待されている産業の政府の潜在的パートナーとして，頻繁に議論に登場するのである。

資源論は非常に幅広い領域を網羅するジャンルであるが，まずは自然科学寄りの研究例と人文科学寄りの研究例を紹介したい。自然科学寄りの論文として，ここでは50年後の北西海岸の生態系分布を予測し，そこから先住民が抱えるだろう問題を明らかにし，政策提言をおこなった２つの論文をあげよう。地球温暖化のせいで海の生態系が激変すると考えたウェザードンらは，50年後にサケの漁撈ができるのは北西海岸北部のみになると予測する。それ故，南部の先住民が従来どおりサケを自給用に確保したければ，北部と南部を横断する広範囲な交易制度を確立すべきだと提案している（Weatherdon et al. 2016）。他方，マルーシュカらはウェザードンらと同様の生態系変化を予見した上で，50年後の先住民の食生活と栄養摂取の状況を考察している（Marushka et al. 2019）。マルー

シュカらの予想では，漁撈において先住民が捕獲できる資源の種類や量が変化すればEPAやDHAからビタミンやミネラルにいたるまで，先住民が食事で摂取できる栄養素は現在とくらべて20パーセントから30パーセント落ち込み，しかもその不足分を伝統的食材以外で補うのが難しい。何かしらの対策が求められるとマルーシュカらは警告している。

人文科学寄りの研究例として，ここでは2つのポストモダン研究をとりあげたい。ヴィラトリの論文（Vilatori 2019）は，あるシンポジウムで実際に発せられた語りを言説分析した研究である。クワクワカワクゥの生活圏の一部であるブロートン群島に乱立しているサケの養殖場と周辺水域の環境汚染の因果関係は，地元では長年に渡って論争の火種となってきたが，養殖場賛成派も反対派もともに科学的な検証から生じる不確かさをみずからの主張の柱に据えている点で共通していることをヴィラトリは明らかにした。ヴィラトリがあくまで中立の立場から両者の言説を分析する一方で，明らかな反-養殖の立場から養殖業の展開を厳しく批判するのがシュライバーである（Shreiber 2006）。ただ，シュライバーの争点は，養殖場と環境汚染の因果関係ではなく，養殖業の導入そのものが先住民に対する現代版の植民地主義になっているかどうかであった。

一方でウェザードンらやマルーシュカらが極端に自然科学寄りであり，他方でヴィラトリとシュライバーが極端に人文科学寄りだとすると，その他の研究はいわゆる典型的な，社会科学に軸がある資源論の枠組みに入れられるだろう。以下，これらの研究を大きくつぎの2つのジャンルに分けて，簡単に紹介したい。それらのジャンルとは，1）先住民の認識や要求を明示する研究，2）共同管理の制度が孕む構造的問題を指摘する研究である。

4.2.1 先住民の認識や要求を明示する研究

先住民はいまや，資源の共同管理や環境アセスメントを担う1つの主体として管理制度に組み込まれた存在となっているが，彼らの意向が正確に政策立案に反映されているかは疑わしい。そこでいくつかの論文は，インタビューをもとに資源管理に対する先住民の真の声を明るみに出そうとしている。アレンの論文は，内陸部の先住民へのインタビューから，森林管理において政府が守ろうとする対象と先住民が守ろうとする対象が乖離している状況を示している（Allen 2005）。また，セイリッシュ海やジョージア海峡に面した北西海岸南部のコーストセイリッシュ系住民に関しては，居留地に設けられた禁漁区に対する地元先住民の評価（Ayers et al. 2012），伝統的簗漁の復活の目論見（Dale and Natcher 2015），都市化による生態系への影響の懸念（Gaydos et al. 2015）などを明らかにした研究の例がある。北部の先住民についても同様の研究の例があり，たとえばローリングとヒンツマンはハイダ・グワイ住民（先住民だけでなく非先住民の居住者もふくむ）の考える福祉と海洋環境の理想的な状況とは何か，環境保全と産業育成における彼らのトレードオフに対する優先順位がどうなっているかを示している（Loring and

Hinzman 2018)。リーらの論文では，ハイダとヘイルツク（Heiltsuk）は現在のアワビ管理政策をどう評価しているかが論じられ（Lee et al. 2019），またシルバーは漁師から養殖業に転身する先住民たちが現実に抱えている意外なジレンマとは何かを報告している（Silver 2013)。

4.2.2 共同管理の制度が孕む構造的問題を指摘する研究

現行の共同管理の制度を分析・評価し，そこに孕む構造的な問題をとりあげ，場合によっては政策への提言をおこなう論考も多い。グレゴリーらは管理を担う政府，企業，先住民という 3 つの主体間の説明責任の配分と原理を，上水道管理と養殖業の事例から概説し，アセスメントにおいて生じる不確かさやステークホルダー間の相互理解をめざすためのガイドラインの必要性を指摘する（Gregory et al. 2008)。ブースとスケルトンは，先住民へのインタビューの回答にもとづく内容分析から環境アセスメントにおける先住民の役割への提言をおこなっている（Booth and Skelton 2011)。ハイダ・グワイのニシン漁業と管理についてはラムらの提言がある（Lam et al. 2019)。ここでは地元住民の価値観と（ニシンだけでなく）生態系全体を考慮した管理の実施が提唱され，またニシン漁業と魚卵（数の子）採集業の管理体制を別個におこないつつ後者に重点をおくべきと提言されている（Lam et al. 2019)。ピンカートンらの論考は，州北部（ツィムシャン）と中部（クワクワカワクゥ）の 2 地域における共同管理のステークホルダー間の力の配分をめぐる，ある種の比較政治学である。南部ではそもそも政府と（先住民など）地元ステークホルダーの関係が対等でないことが問題である一方，北部では地元ステークホルダーと政府の関係は対等だが，ステークホルダーが一枚岩ではなく，その内部で力の配分をめぐる調整がむずかしいことが指摘されている。それぞれの地域の問題点を考慮した上で構造的な力の配分を是正することが提言されている（Pinkerton et al. 2014)。

北西海岸というと，どうしても海域と水産資源の管理の問題が中心になりやすいが，森林と野生動物に関する現行の管理法を評価しようとする論考もけっして少なくない（e.g., Hotte et al. 2018; Morton et al. 2012; Pinkerton 2018; Takeda et al. 2010; Wilson 2002)。これらのなかで，とりわけモートンらの論文は，近年導入されるにいたった 2 段階の資源管理計画を分析している点で興味深い。モートンらによると，現在ブリティッシュ・コロンビア州の森林管理においては，さまざまなステークホルダー（先住民，非先住民の地元住民，企業など）が対面で議論をおこなう第 1 段階につづいて，それをふまえて政府と先住民だけが最終的な政策決定をおこなう第 2 段階があるという，2 段階方式が採用されているという。さまざまなステークホルダーへのインタビュー調査から，モートンらは，この方式がすべてのステークホルダーに概ね賛同されていること，従来から共同管理の問題とされていた先住民の消極的参加を劇的に改善したことを評価する一方，先住民を特権化するこの方式が「先住民以外のステークホルダーからの反発をい

かに回避するか」という新たな課題を生みだしていることを紹介している（Morton et al. 2012）。

ここに紹介した資源論的な研究には，多少の例外はあるものの，ほとんどに以下の特徴がみいだせる。第1に，社会学や経済学を主軸としながらも，既存の学問領域の範囲にこだわらない分野横断的な特性をもっている。第2に，多くの研究が，先住民らステークホルダーへのインタビュー調査をもとにデータを収集している。だが，第3に，インタビューを主たる方法論に採用してはいるものの，人類学のように状況を内側から（ボトムアップ式に）みるのではなく，あくまで俯瞰的に（トップダウン式に）みる傾向が強い。それ故，インタビューの結果は状況の内実の複雑さを示すデータではなく，内容分析やその他のコード化を経て意見分布の広さを数量的に配置するだけにとどまっているともいえる。第4に，資源論の枠組みでは地元のステークホルダーたちはあくまでインフォーマントとして登場するのであって，著者としては登場しない。つまり資源論の業績の多くはステークホルダーとのコラボレーションではない。この，第3と第4の特徴は，つぎにとりあげる現在の人類学的な環境論と比較したとき大いに際立つものである。最後に，ほとんどの研究は資源管理政策に対して何かしらの提言をおこなっている。直接的な提言がない場合も，現制度の問題点を明らかにすることを通じて政策提言を暗示している場合がほとんどである。

4.3 多様化した人類学

今世紀に入るまで，北西海岸の環境論を主導してきたのは人類学だった。当時の環境論では生態人類学が主流となり，おもに伝統的な生業活動と資源の分布，そしてこれら生業活動や資源にまつわる諸条件と社会組織の関係に焦点が当てられていた。こうした生態人類学的な研究の流れは，一方では「先住民の伝統はやがて消えゆく」という前提の崩壊，他方では生業活動そのものの変容により縮小されつつあるが，それでも今世紀においても細々と維持されている。たとえば立川（2008）は，2006年にクワクワカワクゥが実施したフードフィッシング（かつての生業活動に相当）の参与観察をもとに，サケ漁の技術，漁獲，分配に関する報告をおこなっている。先住民自身による出版も散見される。たとえばクワクワカワクゥのアルヴィンとヴィ・シウィド夫妻は，みずからが祖先から受け継いだサケの缶詰加工の方法を次世代に伝えるため書籍化している（Sewid and Sewid 2008）。また，かつての生態人類学では重視されなかった近代産業下の労働についてもいくつかの研究業績が発表されている。クワクワカワクゥがおこなう商業的なサケ漁（Tachikawa 2008; 立川 2009），ツィムシャンがおこなう林業（Menzies and Butler 2001）の研究がその例である。

こうしたかつての生態人類学の流れを汲む研究に加え，今世紀に入ってからはTEK研究に人類学が貢献してきたことは先述の通りである。そして今世紀の人類学的な環境論

では，もう１つ大きな流れが生みだされてもいる。すでに述べたように，TEK 調査を経験した人類学者たちによる重大な発見の１つは，先住民の資源管理術が彼らの自然に対する認識，つまり世界観に裏打ちされたものだという点であった。まさにこの事実こそが，実際の資源管理政策や資源論で TEK が敬遠される要因になったのは否めない。だが，アカデミックな人類学の側ではその反動もあっての故か，先住民の世界観がかえって大々的にとりあげられるようになっている。たとえばソーントンは，TEK 研究の成果を発表したのとほぼ同時期にあたる2008年に *Being and Place among the Tlingit* という単著を発表し，ものや動植物，そして土地の名称に反映されるトリンギットの世界観に深く立ち入った議論を展開している（Thornton 2008）。同様に，アトレオも現代の気候変動にどう対処するかという問いに対し，その解決策を模索するにあたってヌーチャーヌルスの世界観に依拠している（Atleo 2011）。

先住民の世界観に焦点をあてる風潮は，人類学内部で昨今話題になっている存在論的転回という理論的潮流からももたらされている。人間（文化）と自然を対置させつつ，多様性を人間（文化）の側だけに認める一方で，自然を唯一絶対の客体として位置づける近代科学に異議を唱えるところからはじまったこの理論的潮流は，近代科学とは違う形で「人間とは何か」，「自然とは何か」を模索する。北西海岸の先住民に関しては，エバートがこの理論をふまえてコーストセイリッシュ系住民における人間と自然の二分法の在り様を分析している（Ebert 2010）。エバートの主張によると，コーストセイリッシュの人間（あるいは自然）は，いわゆる「パースペクティヴィズム」で示されたように，〈人間-自然〉の二項対立を相対化する類のものではない。先住民もまた〈人間-自然〉という二項対立をもっているが，その線引きの仕方が近代科学とは違うのである。

かつての生態人類学が，先住民による自然への働きかけの実践を対象とする学問であるという意味で〈行動系〉のジャンルと呼べるとすれば，先住民の自然に関する認識を彼らの世界観から紐解こうとするこれらの研究は〈認識系〉ジャンルと呼べるだろう。21世紀におけるこうした〈認識系〉ジャンルの発展は，上記の諸研究を生みだした以外に，人類学的な環境論を２つの意味で刺激した。その１つはポトラッチの宗教学的研究の再評価を促したことであり[5)]，もう１つは先住民による自然認識と分類や活用の方法などを分析する認識人類学の興隆をもたらしたことである。先住民の植物の分類や利用に関する認識人類学的な研究（e.g., Deur et al. 2015; Deur and Turner eds. 2005）が今世紀以後頻繁に発表されるようになったのも，まさにこのような背景があったからこそだといえるだろう[6)]。また，これら〈認識系〉のジャンルにおいては，フィールドワークおよび業績の作成において，研究者と先住民のコラボレーション作業が劇的に増えたこともふれておいてよい事実であろう。同じ特徴は，本論文ではとくに扱っていないが，考古学にもみられる[7)]。

4.4 小括

以上みてきたように，今世紀に入ってからの北西海岸の環境論は，大きく様変わりした。それまで人類学，とりわけ生態人類学主導で先住民の伝統的生業活動を再構成してきた環境論は，北西海岸における資源の減少と気候変動の影響が顕著になった今世紀に入り，資源論という新たなジャンルが主導する実践的な領域に変容しつつある。ただ，いかに変容しようとも，先住民が重要な主体として語られる存在であることに変わりはない。変わったのは描写される先住民の特性である。かつて，「消えゆく存在」として語られた先住民は，現在では「TEKの保持者」，「資源管理の共同管理者」，「新たな事業の潜在的パートナー」としてのプロフィールをもつ存在になっている。

他方，資源論の登場で北西海岸の環境論の中心的役割を奪われた（ようにみえる）人類学も独自の変容を遂げつつある。従来通りの生態人類学に加え，現在ではTEK研究，さらには先住民の世界観や自然認識に着目しつつ先住民と自然環境の関わりについて論じる研究も平行しておこなわれるようになった。これはいってみれば，「行動系」のジャンルから「認識系」ジャンルへの変容ともとれるだろう。この変容に伴い，かつてのポトラッチ研究では軽視された宗教学的研究が掘り起こされ，また認識人類学も再活性化している。方法論をみると，先住民とのコラボレーションが劇的に増加している点も見逃せない。北西海岸の環境論そのものが大きく変容したのと同様，人類学もまた劇的に多様化しているのである。

5 終わりに──北アメリカ北西海岸の環境論の将来像に向けて

19世紀後半に誕生した北西海岸の環境論は，1990年頃の顕著な資源の減少とそれに伴う過去の資源管理体制への反省の時期を境に，劇的に変容した。「消えゆく存在」としての先住民の伝統的な生業活動の再構成を目的としていた環境論は，今世紀に入ると将来の適切な資源管理を模索する実践的ジャンルとしての色を濃くしつつある。そして先住民は，将来の資源管理におけるキーパーソンとして描写されている。

こんにちの北西海岸の環境論が実践的，応用学的ジャンルに変容するにあたり，大きな役割を果たしたのが資源論というジャンルであることに疑いの余地はない。北西海岸で資源の減少と気候変動が問題とされる限り，資源論を中心とした環境論の果たすべき役割は，今後もますます大きくなっていくだろう。だが，現在の環境論における資源論（および資源管理をめぐる行政）と人類学のスタンスの違いは，けっして見過ごすことができるものではない。TEKの背後にある先住民の世界観をどう扱うかという点をめぐる，資源論と人類学との違いは，現時点では──人類学者ソーントンがみずからの研究を資源論の雑誌に掲載するか人類学的著作として発表するか区別するように──器用に対処されているようにみえる。しかし，今後北西海岸の環境論がより有意義な形で論を展開

させるためには，先住民の世界観の扱いをめぐるこのギャップを可能な限り埋めることが最大の課題となるであろう。

謝辞

本論文で紹介された論文の収集作業では，ブリティッシュ・コロンビア大学大学院の永井文也さんから多大な協力を得た。また，本研究においては科学研究費補助金（基盤研究A「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状，未来に関する比較研究」代表：岸上伸啓，課題番号：JP19H00565）を活用した。感謝の意を表したい。

注

1）北米先住民研究の集大成ともいえる *Handbook of North American Indians* には，北西海岸でフィールドワークをした研究者の一覧があげられている（Suttles and Jonaitis 1990: 73–80）。じつに多くの名前が掲載されているが，その多くはどちらかというと言語学的（言語調査の）フィールドワークをおこなったらしい。なお，ここには調査期間は書かれていない。

2）ここにとりあげた3人の人類学者は，私の知る限りでだが，最低でも12か月以上のフィールドワークを実施したことが明らかな人物である。

3）かつて私がカナダのビクトリア大学の学生だった2000年，自身も北西海岸先住民の貴重な生態人類学者であった同大学のリーランド・ドナルド先生は，「北西海岸の生態人類学的研究を教えてほしい」という私の依頼に対し，まっさきにオバーグとスチュワートの著をあげた。このエピソードは，スチュワートの著が彼女の道楽の域を超えた優れた研究であることを示すと同時に，北西海岸の生態人類学の層の薄さも示しているといえる。

4）ウェブサイト（ecoknow.ca/research.html, 2021年8月11日閲覧）では，このプロジェクトが発足した正確な年代が書かれていない。しかし最初の成果がでたのが2002年となっているのでそれまでには発足していたとみなせる。

5）活発だったポトラッチ研究における議論も1960年代にはある程度落ち着いたといわれている。しかし，それ以後もポトラッチ研究はつづき，新たな解釈の可能性が模索された。それらの解釈の1つに，ポトラッチを先住民の宗教や世界観の表現の場とみなすものがあった（Goldman 1975; Walens 1981）。ただ，私が私的に北西海岸先住民の研究者たちと接する限りにおいて，この「宗教学的」研究はけっして評判のいいものとはいえなかった。たとえば先述（注3）のドナルド先生は，これらの研究は総じて使用するデータの信憑性に乏しいことを指摘していた。このようにポトラッチ研究においてけっして評判がよくなかった宗教研究のなかで，唯一の例外ともいえるのがトリンギットのポトラッチに関する研究（Kan 1989; 益子 1982）である。トリンギットでは，高名な人物の死がポトラッチの開催のおもなきっかけになるため，死と再生にまつわる宗教観がポトラッチのなかで表現され，強調されることも多いからだ。

6）たとえば北西海岸の認識人類学を牽引した1人であるナンシー・ターナーの例をあるウェブサイト（www.researchgate,net/profile/Nancy-Turner-7, 2021年8月27日閲覧）からみてみよう。そこには彼女の166点の業績が掲載されている。このなかの出版年が明記されている155点のうち，彼女の最初の業績が発表された1970年から20世紀が終わるまでの30年間に発表された業績は49

点，今世紀に入ってから現在までの約20年間に発表された業績が106点ある。今世紀に入って彼女が精力的に出版をおこなっている正確な理由は不明だが，私には先住民のTEKや認識人類学に対する社会の需要と関心の高まりが影響していると思われてならない。なお，本文中には示さなかったが，彼女もまた今世紀に入ってからの人類学的TEK研究を担った1人であり（e.g., Turner et al. 2000; Turner and Clifton 2006），それ以後に彼女の業績が劇的に増えたのも興味深い。

7）たとえば以下の考古学的業績が先住民とのコラボレーションである（Lepofsky et al. 2017; Lepofsky and Lertzman 2018; Smith et al. 2019）。

参照文献

＜和文＞

岩崎・グッドマンまさみ

2002 「カナダ北西海岸におけるサケをめぐる対立」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海――水産資源管理の人類学』pp. 168–188，京都：人文書院。

岸上伸啓

2019 「世界の捕鯨と捕鯨に関する最近の研究動向」岸上伸啓編『世界の捕鯨文化――現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）pp. 5–30，大阪：国立民族学博物館。

タウンゼント, P.

2004 『環境人類学を学ぶ人のために』岸上伸啓・佐藤吉文訳，京都：世界思想社。

立川陽仁

2008 「現代カナダにおける北西海岸先住民の生業活動――クワクワカワクゥの漁業漁師の例から」『立教アメリカン・スタディーズ』30: 77–94。

2009 『カナダ先住民と近代産業の民族誌――北西海岸におけるサケ漁業と先住民漁師による技術的適応』東京：御茶の水書房。

2020 「カナダ太平洋沿岸水域における気候変動の影響に関する近年の研究動向」『人文論叢』37: 79–88。

益子待也

1982 「ポトラッチの神話学――トリンギット族における死と再生の論理」『民族学研究』47(3): 221–244。

＜欧文＞

Allen, S.

2005 Using Perceptual Maps to Communicate Concepts of Sustainable Forest Management: Collaborative Research with the Office of the Wet'suwet'en Nation in British Columbia. *Forestry Chronicle* 81: 381–386.

Assu, H. with J. Inglis

1989 *Assu of Cape Mudge: Recollections of a Coastal Indian Chief.* Vancouver: UBC Press.

Atleo, R. (Umeek)

2011 *Principles of Tsawalk: An Indigenous Approach to Global Crisis*. Vancouver: UBC Press.

Ayers, C., P. Dearson, and R. Rollins
2012 An Exploration of Hul'qumi'num Coast Salish Peoples' Attitudes towards the Establishment of No-take Zones within Marine Protected Areas in the Salish Sea, Canada. *The Canadian Geographer* 56(2): 260–274.

Boas, F.
1966 *Kwakiutl Ethnography*. Edited by H. Codere. Chicago: University of Chicago Press.

Booth, A. and N. Skelton
2011 Improving First Nations' Participation in Environmental Assessment Processes: Recommendations from the Field. *Impact Assessment and Project Appraisal* 29(1): 49–58.

Boxberger, D.
1989 *To Fish in Common: The Ethnohistory of Lummi Indian Salmon Fishing*. Seattle: University of Washington Press.

Bruner, E.
1986 Ethnography in Narrative. In V. Turner and E. Bruner (eds.) *The Anthropology of Experience*, pp. 139–155. Urbana: University of Illinoi Press.

Butler, C.
2004 Researching Traditional Ecological Knowledge for Multiple Uses. *Canadian Journal of Native Education* 28(1–2): 33–48.

Carlson, R.
1990 History of Research in Archaeology. In W. Suttles (ed.) *Handbook of the North American Indian, Volume 7, Northwest Coast*, pp. 107–115. Washington DC: Smithsonian Institution Press.

Dale, C. and D. Natcher
2015 What Is Old Is New Again: The Reintroduction of Indigenous Fishing Technologies in British Columbia. *Local Environment* 20(11): 1309–1321.

De Laguna, F.
1972 *Under Mount Saint Elias: The History and Culture of the Yakutat Tlingit*. Washington DC: Smithsonian Institute Press.

Deur, D., A. Dick, K. Clutesi, and N. Turner
2015 Kwakwaka'wakw 'Clam Gardens': Motive and Agency in Traditional Northwest Coast Mariculture. *Human Ecology* 43(2): 201–212.

Deur, D. and N. Turner (eds.)
2005 *Keeping It Living: Traditions of Plant Use and Cultivation on the Northwest Coast of North America*. Vancouver: UBC Press.

Donald, L. and D. Mitchell
1975 Some Correlates of Local Group Rank among the Southern Kwakiutl. *Ethnology* 14(4): 325–346.
1994 Nature and Culture on the Northwest Coast of North America: The Case of Wakashan Salmon Resources. In E. Burch, Jr. and L. Ellanna (eds.) *Key Issues in Hunter-Gatherer Research*, pp. 95–117. Oxford: Berg.

Driver, H.
1961 *Indians of North America*. Chicago: University of Chicago Press.

Drucker, P.

1958 *The Native Brotherhoods: Modern Intertribal Organizations on the Northwest Coast* (Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology Bulletin 168). Washington: U. S. Government Printing Office.

1963[1955] *Indians of the Northwest Coast* (American Museum of Natural History, Anthropological Handbook, No. 10). Paperback Edition. New York: The Natural History Press.

Ebert, M.

2010 Human Versus Person: An Examination of Nature/Culture on the Northwest Coast. *Native Studies Review* 19(1): 29–51.

Ford, C. (ed.)

1968[1941] *Smoke from Their Fires: The Life of a Kwakiutl Chief.* Hamden, CT: Archon Books.

Gaydos, J., S. Thixton, and J. Donatuto

2015 Evaluating Threats in Multinational Marine Ecosystems: A Coast Salish First Nations and Tribal Perspective. *Plos One*: 10(12): e0144861.

Gladstone, P.

1972 Native Indians and the Fishing Industry of British Columbia. In M. Nagler (ed.) *Perspectives on the North American Indians*, pp. 156–174. Toronto: McClelland and Stewart.

Goldman, I.

1975 *The Mouth of Heaven: An Introduction to Kwakiutl Religious Thought.* New York: Wiley.

Gregory, R., L. Failing, and M. Harstone

2008 Meaningful Resource Consultations with First Peoples: Notes from British Columbia. *Environment* 50(1): 36–45.

Harris, D.

2001 *Fish, Law, and Colonialism: The Legal Capture of Salmon in British Columbia*. Toronto: University of Toronto Press.

2008 *Landing Native Fisheries: Indian Reserves and Fishing Rights in British Columbia, 1849–1925*. Vancouver: UBC Press.

Hotte, N., H. Nelson, T. Hawkins, S. Wyatt, and R. Kozak

2018 Maintaining Accountability between Levels of Governance in Indigenous Economic Development: Examples from British Columbia. *Canadian Public Administration* 61(4): 523–549.

Ignas, V.

2004 Opening Doors to the Future: Applying Local Knowledge in Curriculum Development. *Canadian Journal of Native Education* 28(1–2): 49–60.

Kan, S.

1989 *Symbolic Immorality: The Tlingit Potlatch of the Nineteenth Century.* Washington DC: Smithsonian Institution Press.

Kew, M.

1990 History of Coastal British Columbia since 1849. In W. Suttles (ed.) *Handbook of the North American Indian, Volume 7, Northwest Coast*, pp. 159–68. Washington DC: Smithsonian Institution Press.

Knight, R.
1996 *Indians at Work: An Informal History of Native Labour in British Columbia, 1858–1930*. Revised Edition. Vancouver: New Star Books.
Lam, M., T. Pitcher, S. Surma, I. Scott, M. Kaiser, A. White, E. Pakhomov, and L. Ward
2019 Value- and Ecosystem-Based Management Approach: The Pacific Herring Fishery Conflicts. *Marine Ecology Progress Series* 617(8): 341–364.
Lee, L., M. Reid, R. Jones, J. Winbourne, M. Rutherford, and A. Salomon
2019 Drawing on Indigenous Governance and Stewardship to Build Resilient Coastal Fisheries: People and Abalone along Canada's Northwest Coast. *Marine Policy* 109: 1–15.
Lepofsky, D., C. Armstrong, S. Greening, J. Jackley, J. Carpenter, B. Guensey, D. Mathews, and N. Turner
2017 Historical Ecology of Cultural Keystone Places of the Northwest Coast. *American Anthropologist* 119(3): 448–463.
Lepofsky, D. and K. Lertzman
2018 Through the Lens of the Land: Reflections from Archaeology, Ethnoecology, and Environmental Science on Collaborations with First Nations, 1970s to the Present. *BC Studies* 200: 141–160.
Lewis, J. (Wuyee Wi Medeek)
2004 Forests for the Future: The View from Gitłaala. *Canadian Journal of Native Education* 28 (1–2): 8–14.
Loring, P. and M. Hinzman
2018 "They're All Really Important, But...": Unpacking How People Prioritize Values for the Marine Environment in Haida Gwaii, British Columbia. *Ecological Economics* 152: 367–377.
Macnair, P.
1971 Descriptive Notes on the Kwakiutl Manufacture of Eulachon Oil. *Syesis* 4: 169–177.
Marushka, L., T. Kenny, M. Batal, W. Cheung, K. Fediuk, C. Golden, A. Salomon, T. Sadik, L. Weatherdon, and H. Chan
2019 Potential Impacts of Climate-Related Decline of Seafood Harvest on Nutritional Status of Coastal First Nations in British Columbia, Canada. *Plos One*: 14(2): e0211473.
Menzies, C.
2004 Putting Words into Action: Negotiating Collaborative Research in Gitxaala. *Canadian Journal of Native Education* 28(1–2): 15–32.
Menzies, C. and C. Butler
2001 Working in the Woods: Tsimshian Resource Workers and the Forest Industry of British Columbia. *American Indian Quarterly* 25: 409–430.
2007 Returning to Selective Fishing through Indigenous Fisheries Knowledge. *American Indian Quarterly* 31: 441–464.
Mitchell, D. and L. Donald
1988 Archaeology and the Study of Northwest Coast Economies. *Research in Economic Anthropology*, Supplement 3: 293–351.
2001 Sharing Resources on the North Pacific Coast of North America: The Case of the Eulachon

Fishery. *Anthropologica* 43: 19–35.

Morton, C., T. Gunton, and J. Day

2012 Engaging Aboriginal Populations in Collaborative Planning: An Evaluation of a Two-Tiered Collaborative Planning Model for Land and Resource Management. *Journal of Environmental Planning and Management* 55: 507–523.

Nadasdy, P.

1999 The Politics of TEK: Power and the 'Integration' of Knowledge. *Arctic Anthropology* 36 (1–2): 1–18.

Newell, D.

1994 *Tangled Webs of History: Indians and the Law in Canada's Pacific Coast Fisheries*. Toronto: University of Toronto Press.

Oberg, K.

1973 *The Social Economy of the Tlingit Indians*. Seattle: University of Washington Press.

Piddocke, S.

1965 The Potlatch System of the Southern Kwakiutl: A New Perspective. *Southwestern Journal of Anthropology* 21: 244–264.

Pinkerton, E.

2018 Benefits of Collaboration between Indigenous and Non-Indigenous Communities through Community Forests in British Columbia. *Canadian Journal of Forest Research* 49: 387–394.

Pinkerton, E., E. Angel, N. Ladell, P. Williams, M. Nicolson, J. Thorkelson, and H. Clifton

2014 Local and Regional Strategies for Rebuilding Fisheries Management Institutions in Coastal British Columbia: What Components of Comanagement Are Most Critical? *Ecology & Society* 19(2): 676–690.

Rohner, R.

1967 *The People of Gilford: A Contemporary Kwakiutl Village* (National Museum of Canada Bulletin 225. Anthropological Series 83). Ottawa: National Museum of Canada.

Sewid, A. and V. Sewid

2008 *Canning Salmon…: In the Way We Were Taught*. Victoria: Trafford Publishing.

Shreiber, D.

2006 First Nations, Consultations, and Rule of Law: Salmon Farming and Colonialism in British Columbia. *American Indian Culture and Research Journal* 30(4): 19–40.

Silver, J.

2013 Neoliberalizing Coastal Space and Subjects: On Shellfish Aquaculture Projections, Interventions, and Outcomes in British Columbia, Canada. *Journal of Rural Studies* 32: 430–438.

Smith, N., D. Lepofsky, G. Toniello, K. Holmes, L. Wilson, C. Neudorf, and C. Roberts

2019 3500 Years of Shellfish Mariculture on the Northwest Coast of North America. *Plos One* 14(2): e0211194.

Spradley, J. (ed.)

1972[1969] *Guests Never Leave Hungry: The Autobiography of James Sewid, a Kwakiutl Indian*. Montreal and Kingston: McGill Queen's University Press.

Stewart, H.
1977 *Indian Fishing: Early Methods on the Northwest Coast*. Vancouver: Douglas and McIntyre.
Sutlles, W.
1960 Affinal Ties, Subsistence, and Prestige among the Coast Salish. *American Anthropologist* 62(2): 296–305.
1968 Coping with Abundance: Subsistence on the Northwest Coast. In R. Lee and I. De Vore (eds.) *Man the Hunter*, pp. 56–68. Chicago: Aldine Press.
Suttles, W. (ed.)
1990 *Handbook of North American Indians, Volume 7, Northwest Coast*. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
Suttles, W. and A. Jonaitis
1990 History of Research in Ethnology. In W. Suttles (ed.) *Handbook of North American Indians, Volume 7, Northwest Coast*, pp. 73–87. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
Tachikawa, A.
2008 Is Commercial Fishing a Traditional Pursuit? Technological Development of the Commercial Salmon Fishery and Adaptation by Kwakwaka'wakw Commercial Fishers. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 8: 29–52.
Takeda, L. and I. Røpke
2010 Power and Contestation in Collaborative Ecosystem-based Management: The Case of Haida Gwaii. *Ecological Economics* 70: 178–88.
Thornton, T.
2008 *Being and Place among the Tlingit*. Seattle: University of Washington Press.
2015 The Ideology and Practice of Pacific Herring Cultivation among the Tlingit and Haida. *Human Ecology* 43(2): 213–223.
Thornton, T., V. Butler, F. Funk, M. Moss, J. Hebert, J. Elder, R. Craig, S. Hamada, and A. Maciejewski Scheer
2010a Herring Synthesis: Documenting and Modeling Herring Spawning Areas within Socio-Ecological Systems over Time in the Southeastern Gulf of Alaska. *Final Report to the North Pacific Research Board, Project #728*. Portland: Portland State University.
Thornton, T. and J. Hebert
2014 Neoliberal and Neo-Communal Herring Fisheries in Southeast Alaska: Reframing Sustainability in Marine Systems. *Marine Policy* 61: 366–375.
Thornton, T., M. Moss, V. Butler, J. Hebert, and F. Funk
2010b Local and Traditional Knowledge and the Historical Ecology of Pacific Herring in Alaska. *Journal of Ecological Anthropology* 14(1): 81–88.
Turner, N. and H. Clifton
2006 The Forest and the Seaweed: GitGa'at Seaweed, Traditional Ecological Knowledge, and Community Survival. In A. Pieroni and L. Price (eds.) *Eating and Healing: Traditional Food as Medicine*, pp. 65–86. Boca Raton: CRC Press.
Turner, N., M. Ignace, and R. Ignace
2000 Traditional Ecological Knowledge and Wisdom of Aboriginal Peoples in British Columbia. *Ecological Applications* 10(5): 1275–1287.

Vayda, A.
1961 A Re-examination of Northwest Coast Economic Systems. *Transactions of the New York Academy of Science* 23: 618–624.
Vilatori, M.
2019 Uncertain Risks: Salmon Science, Harm, and Ignorance in Canada. *American Anthropologist* 121(2): 325–337.
Walens, S.
1981 *Feasting with Cannibals: An Essay on Kwakiutl Cosmology.* Princeton: University of Princeton Press.
Weatherdon, L., Y. Ota, M. Jones, D. Close, and W. Cheung
2016 Projected Scenarios for Coastal First Nations' Fisheries Catch Potential under Climate Change: Management Challenges and Opportunities. *Plos One*: 11(1): e0145285.
Wilson, P.
2002 Native Peoples and the Management of Natural Resources in the Pacific Northwest: A Comparative Assessment. *American Review of Canadian Studies* 32: 397–414.
Wright, M.
2010 Aboriginal Gillnet Fishers, Science, and the State: Salmon Fisheries Management on the Nass and Skeena Rivers, British Columbia, 1951–1961. *Journal of Canadian Studies* 44(1): 5–35.